



理系文芸誌

元々元々

vol.4 2004冬号

ハム の 女



小
野
本
洋

ポテロという画家を知っているだろうか。知っているのであれば話が早いのだが、彼の描く人間は独特な輪郭で描かれる。その作品に登場する人物は、体や顔など全ての形がまるで足の小指のように丸々と肥えとても美しい。

僕がポテロを知ったのはもう何年も前で、どれくらい昔だったのか思い出せない。だがその時に、僕の中で、人の完璧な美しさが決まったように思える。そのくらいに彼の描く絵はダイナミックで素晴らしい物であった。とにかく僕は、彼の描いた人物よりも美しいと思える人物に出会ったことがないし、さらには写真や、他の画家の描く絵の中にも、ブラウン管の中にも見たことはない。もっと言ってしまうえば、地球上でも銀河系からでもそんな人物を見つけ出すことは不可能であろうと思える程である。

彼の描く絵に出てくる人達は美しい。なぜなら「彼ら」の肥え方には皺という物が全く見られない。そんな肥え方なんて彼の描くキャンパスの中でしか存在し得ない。現実世界で、皺がなくて肥えているというのはむくみという言葉で片付けられてしまうのであろうが、そんな言葉で片付けることが出来ないく

らいに「彼ら」の肉体にはハリと丸みがある。

また、この丸みという物も「彼ら」独特の物である。例えば丸々とふくよかに肥えた人物がいたとしたら、そういった方の脂肪は柔らかくハリがない物であろうし、現実世界ではそういった脂肪に重力がかかるのだからその丸みは垂れ下がる。言うなれば重力がないところでは丸みを帯びた物も、地球上ではスライム型に変形してしまうからである。

そうつまり、「彼ら」の肥え方というのは現実世界にはとても有り得ない物であり、だからこそ完璧な物なのである。それは倫理用語を使うのであれば太り方のアイデアであり、数学用語で言うならば太り方の黄金比である。もっと言うなれば現実世界の太り方というのは全て偽物で、ただ彼らの模倣でしかないということでもある。

だからふくよかな人達を醜いとする見方は、現実世界の、つまり模倣の太り方を見て、太り方のアイデアを想起出来ない者達の見方であると僕は思うのだ。

しかしやはりどれだけ説明しても、全くポテロの絵を見たことがない人達には「彼ら」の美しさを説明するのは不可能である。百聞は一見に如かずという言葉はまさにこのことを言い得ていると思う。だがその美しさをさらに比喩的に分かりやすく伝えようとする、「彼ら」は「ハムである」と言える。あまりリッ

ちな生活を送っているとはいえない僕らの思うようなハムというのは、高級レストランでメロンの上に乗って出てくるようなあれではなくて、定食屋で目玉焼きの下で焼かれるほうのあれである。あの丸々とした形状や、艶のあるピンク色、そして少し弾力のある食感などのイメージが、僕にはボテロの描く人物のイメージと重なる。

だから僕にとつて人がどれだけ美しいかを測るメジャーは、その人がどれだけハムに近いかということである。

これが今の僕の、二十歳の夏の僕の、現段階での、今までにふれた様々な思想や芸術に、自分の意見を加えて得られた結論のような物である。

2

その日の午後、僕は長く続けたファミレスのバイトを辞めることになっていった。辞める理由は色々あって色々な事情がほつれていて巧く解けないような状態だから言葉にし辛い。最近料理長が変わったことや、ウェイターのユニフォームが前よりもタサくなったこと、新人の女の子の使う言葉遣いなんかに所謂『ジェネレーションギャップ』を感じたことなんかもあるけれども、一番大きな理由は、ただ何となくつまらなくなった

からだと思う。

今日で最後のバイトかあと思うと一応半年以上は続けてきたバイトだったから、名残惜しい気持ちもあったが、そういうった思いは、最近異動によりうちの店に来た、ハリもなく太つてて気持ち悪い調理長の言葉で冷めてしまった。

「ヤマシタ君、今日は悪いんだけど、二時にあがってくれるかなあ？」

何だかさつきまで立ち込めていた哀愁の念がとても馬鹿馬鹿しい物に思えてきた。

僕のバイト先は、家から徒歩で十分くらいのちよつとお洒落な町の隅っこにあった。その町は東京にあるのに大きなビルが建ったりするというような過程とは違った発展の過程を辿ったらしく、小さくて可愛らしいお店が幾つもあるような町である。その町の中でも、その店はさらに小さく構えていて、あんまり小さいために周りの住人からの認知度も低く、お客が入らない。特にその日みたいな平日の昼は人件費削減のためにアルバイトを早くあがらせることがあった。

以前の調理長はとにかく頭の悪い奴だったから、人件費を削るとかっていう考え方がなかったらしく、そういうった所がファミレスの本社は気に入らなくて、異動になってしまったという噂があった。

まあそんなことはどうでもいい。僕はもう今日でこのバイトを辞めるんだ。

二時六分にタイムカードを切った後、そのまま休憩室で、どうせ入っていないだろうなあと思いつつも、メールをセンターに問い合わせた。その後は、最近教えてもらった、同じ大学の所謂『おた』達が作っている掲示板を見ながら、こいつらよりもまともな人間に生まれてよかったなあ、といった変な優越感に浸っていた。

そんなことをしているうちに二時半になり、新人のウェイトレスのマリちゃんがりになって休憩室に入ってきた。

「ヤマシタさんって今日でバイト辞めちゃうんですよね？」といつもの少し外れた感じの声で、僕がバイトを辞めるのに対して、嬉しいとも寂しいとも取れるような言い方で聞いてきたことが少し腹立たしかった。

「まあね」

だから僕の返答も気持ち無愛想になった。

「なら今度、バイトの皆で、ヤマシタさんの送別会ってことで飲みましょうよ」

このマリちゃんって奴は、僕が辞めることに対して嬉しいとも寂しいとも思っていないようだ。つまり僕が辞めることには関心がなく、何かにかこつけて皆で飲んだりわいわい騒いだり

することが好きな女なんだなあと感じた。だから僕は、素直にいいよと言えずに、本当は僕には時間なんていくらでもあるのに見栄を張って「ああ、時間が合えばね」とだけ答えた。

3

その後、どういう理由かはよく分からないけれども、二人で公園に行った。その日は七月の半ばということもあって、蟬雨が一層熱さを演出している日だった。バイトが終わって多少疲れていることもあって何か飲む物が欲しかったから、公園に行く途中のコンビニで僕はビールを買い、また彼女にもビールを買ってあげた。

公園のベンチに座って小さな送別会の乾杯をした後で、二人で話をした。マリちゃんは予想通りのお喋りだったから会話は彼女の一方的な質問に対して、僕が一方的に答えるという感じになった。

僕は、今ある大学に通っていること、勉強するために前橋から東京に出てきたこと、でも今は本当にどうしようもないくらいに学校に行くのが嫌で、もう三ヶ月は学校に行っていないこと、その理由は同じ大学の学生があまりに嫌いだからで、それはもう嫌いな理由が大体百個くらいあることなんかを話した。

話している時に、新人とはいえ、バイト中にあまりにマリちゃんに自分のプライベートな話をしたことがなかったことに驚いた。

なぜ今までそういう話をしなかったのか、それは単にマリちゃんがハムとは無縁の体型であることに起因しているのかもしれない。彼女からはどちらかというと細身で、背も高くすらっとしていたといった印象を受けた。けれども、やせていてもハムを思わせる人もいる。何だかよく分からなくなってきた。要するに僕の中でまだハムと人間が上手く接合しておらず、非常に曖昧に、どこでくつついているのか分からなくなるような何点かで二つがくつついているのだと思う。

「今日みたいに暑くて疲れる日は足から根っこが生えてきたら素敵だなんて感じることもありません？」

さつきまで僕のプロフィールを探っていた彼女から同意を求めめるような言葉をかけられたのは少し意外だった。

「そう思ったことはないけれども」

「ヤマシタさんや、他の人がどう感じるのかは分からないけど、私は疲れることが多いの。だから足に根っこが生えれば、私から疲れが除かれて、今日みたいに暑い日だったら足から代わりにお水が入ってきて、だからそういう風にいつも思うの」

「普通だったら、足に根っこが生えたら、とかじゃなくて肩甲

骨のあたりから羽が生えて、疲れとは関係のない外の世界に羽ばたきたいとかって考えるんじゃないかなあ」

「普通ってというのは、ヤマシタさんだったらそういう風に考えるっていうことですか？」

「僕はあんまり疲れたりだとか、自由になりたいとかって、特に感じることはないけれども」

「じゃあ結局、ヤマシタさんには疲れるようなことがないから、肩に羽を生やして空を飛びたい人の気持ちも、足に根っこを生やして大地と繋がりたい人の気持ちも分からないってことですか？」

「疲れるようなことがなかったかどうかは分からない。疲れるようなことはあったのに僕はそうと感じなかっただけなのかもしれない。でもどちらの人の意見も分かる気がするよ。羽を生やしたい人の気持ちも、根っこを生やしたい人の気持ちも。もっとも、根っこを生やしたいなんていう意見は初めて聞いた気がするけどね」

「確かに時々ふと、それは疲れた時じゃないにしろ、逃げ出したい、遠くの方に飛んで行きたいって思うことはあるの。でも結局そうして遠くに飛んでいっても、飛んでいった行き先でまた同じように逃げ出したって思うようなことがあると思うの。そういうことを繰り返していたら面倒じゃないですか？」

「面倒って、どういうことが面倒なの？」

「飛んでいった先々でまた人間関係を一から作っていく過程と
いうか、そういうことが」

「何だか色々大変そうだね」

「だから言ったでしょ。色々疲れることが多いんだって」

「そうなんだ」

「それに」彼女はビールの缶を右手から左手に持ち替えて、「本
当に疲れた時っていうのは、意外と頑固になってその場所に留
まろうとするんじゃないかって思うんですよ。でも、もしヤマ
シタさんが疲れをそうと思わない人だったら、それは、すごい
ことだと思う」と言った。

考えてみると彼女の言うとおり僕にも疲れることが沢山あつ
て、それは彼女の言う本当に疲れるようなことだから、僕は逃
げずにこの場所において、一応大学にも行っていて、こうしてバ
イトの後輩だった子と話しているのかもしれない。でもバイト
は辞めた。

「僕にとつて今日まで続けていたバイトはマリちゃんの言う疲
れることだったのかなあ」

「そうかもしれない。だけどまたバイトを始めるんだったら
やっぱり、飛んでいった先での人間関係を作っていく過程とい
うのは面倒だと思いますよ」

「そうかもね」

こうして話してみるとマリちゃんは僕が今まで思っていた以
上いろいろなことを感じていて、悩んでいて、でも周りには、
少なくとも僕には、そういった辛さを見せずにアツケラカント
している人なんだと思い、マリちゃんのことをもっと知りたい
と思った。少なくとも前に思っていた、少し頭が悪くて何を考
えているんだか分からない子というようなイメージがなくなっ
たので興味が湧いてきた。

「マリちゃんについてもっと知りたいな」

「それは今度皆でやる送別会でのお楽しみってことで」

「それなら、送別会を楽しみにしてるよ」

「何だか送別会を開いてもらうことがとても楽しみに思えてき
た。」

「それに……」

ここで少し間をおいて、また話し始めた。

「マリっていうのは本当の名前じゃないんですよ」

僕は一瞬耳を疑った。疑った後で、今まで身につけた知識や
経験が全て嘘であったかのような虚無感を覚えた。

「本名は親につけられた物だから、親以外の人から本名で呼ば
れたくないの。私は皆からはマリって呼ばれてたくて。マリリン
モンローみたいなスターになりたいからそう呼ばれてたくてそう

自分で名づけたの」

その後でこの『マリちゃん』と皆に呼ばれたいと思つている子から、親につけてもらった名前を聞いた。それでも結構話しながらなかつたから、聞くまでもう一本つづピールを買いに行き、そうしてようやく聞き出すことが出来た。

でもせっかくなうやう聞き出した名前なのに、次の日には忘れてしまい、思い出すことが出来なかつた。それくらいに彼女の本名は平凡で、すぐ忘れてしまうような物だつた。

そして彼女の連絡先も教えてもらった。バイトを辞めてもこの子とはたまに会つて話したり出来るような交友関係を保てたらいいな、と思つた。彼女であつたら、別にハムとかじゃなくてもいいかなとも思つた。

彼女を公園から近くの駅まで送つていくころには夏の長い日も暮れかけていた。日は暮れても虫の声は聞こえ続けた、そんな日だつた。

4

それから一週間くらいして、僕の送別会をファミレスのバイトの皆に、とある居酒屋で開いてもらった。その日は木曜日、バイト先のファミレスがほとんど込まないということも手

伝い、僕を抜いて全部で八人いるアルバイトのうち五人が来てくれた。来てくれなかつた三人のうち、二人はファミレスのバイトをやっているから来れなかつたのであり、つまり来れそうな人は大体集まつてくれた。

これには理由があつて、僕がバイトを辞めた日の翌日に、新しく、しかもえらく可愛いウエイトレスのアルバイトが働き始めることになつて、その女の子の歓迎会も兼ねて僕の送別会を開いたことが大きい。だから大学が一緒というだけであまり喋つたことのないコックのバイトの男なんかも一応来てくれたりしたのだ。

でも結局そのコックの男は、飲み会の席が離れていたこともあつてその新しいえらく可愛いと評判のウエイトレスとは話せず、隣に座つていたマリちゃんど、うちのバイトで三年近く働いているバイトのリーダーの通称『兄さん』とずっと話していた。その三人は、バイトの社員についてや店の今後のことについてずっと熱く語つていた。兄さんは店で一番責任感を強く持たなければならぬポジションの人だつたし、コックの男はうちの大学の男の気質らしい、嫌に物事をまじめに捉える性格の持ち主だつた。それにマリちゃんは誰にでも話を合わせることの出来る柔軟な子だから、話が熱くなつたのも当然だ。

僕はいえ、そのえらく可愛いと評判のウエイトレスと隣

になったものの、もう自分は辞めていたし、何を話していいかも分からず、前に座った、同期のウェイトレスの、ハムとは無縁の女の子を交えて三人で、最近見た映画の話なんかを適当にして、適当に相槌を打ったりなんかして時間を過ごした。だから飲み会の後で、もつとマリちゃんと話したかったと思った。

えらく可愛いと評判のウェイトレスはいたって平凡な、といつても超名門大学の法学部の学生であるということを除いては、本当に普通の女の子だった。その子の性格は、晴れた日に公園で犬と遊ぶ男の子を思わせた。男の子がボールを投げ、犬がボールを取りに行き、取ってきたボールをまた投げ、といったありふれた日常がこの子を育てていったのであろう、と思っただ。それに全くハムを感じさせないこの子のルックスなんかも、僕が興味を持ってない理由の一つになっていたのであらう。この子の場合なら、ハムでなきや取り合えずお話にならない。

飲み会の最後に、一応名目を送別会であったという理由から色紙をもらった。そして兄さんが「今日でヤマシタとはお別れだけど、これからもバイトの皆で店を盛り上げて……」と、これからのバイトのことを熱く語ってその会は終わった。

家に帰って色紙をじっくり読んだ。それはバイトの皆からのメッセージが書かれた平凡な物であった。そしてその中に一つだけ気になるメッセージが、女の子がよく使うような丸文字で

書かれていた。

あまり苦勞しないような飛びたち先ぞ

教えてあげられますよ

まごまごなら面倒くせがりやのヤマシタさんでも

上手くやっついでいいよ

そしてそのメッセージの後にマリちゃんの本名が記されていた。その名前を読んだ後で、またすぐに彼女の名前を忘れてしまっただろうなと思ひ、忘れる前に一度心の中で彼女の名前を呼んでみた。

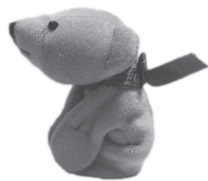
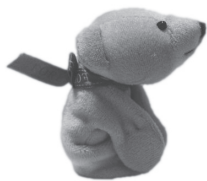
そして、やはり次の日には忘れてしまい思い出せなかった。

冬

籠

the cage which keep winter inside

星
裕
一
郎



「夏の空じゃあ無理なんだよ」

わたしはエミルのその声に驚いて振り返った。

「夏の空なんてなめくじみたいにじめじめべっとりとしてるじゃないか。あんな空、息苦しくって飛べやしないさ」

「じゃあエミルは冬だったら飛べるっていうの？」

わたしは手に持っていた壊れたみたいにだらしないその玩具をそっと床に戻してから、エミルにそう尋ねた。

「うん。きっと、きっとね」

彼は自信満々といった笑顔をわたしに見せた。

「ほくだってまだ試してみたわけじゃないから断言はできないよ。でもね、きっと大丈夫だと思うんだよ」

わたしにはエミルの言っていることがよくわからなかった。クロラの言っていたエミルの自慢とはこのことなのだろうか。

「わたしも飛べるの？」

「うん。リディアだってきっと飛べる」

そっと窓に近づいて、わたしはエミルが飛んでいけるという冬の空を見た。どこまでもうっすらと雲がかかったその空からは、初々しい雪がそっとそっと静かに降っていた。何故だかクロラの流した涙を思い出した。

「ねえ？」

わたしはくりとエミルに向き直ってから小さな声で囁いた。

「どうしたの？ リディア」

「ねえ？ どうして夏はダメなのに、冬だったら飛べるの？」

エミルはちょっとだけ目を大きくして、嬉しそうに言った。

「だってこんなに寒いんだよ」

そしてちょっとだけ間を置いてからエミルは続けた。

「なんか、生きてるって心地がしないだろう？」

(dessins d'enfants)

冬。

澄んだ空気がそつと頬に触れたように感じられて、私はゆっくりと目を覚ます。

最初に私の視界を支配したものは純度の高い空。

もしかしたら誰かの為に無理をしているのではないだろうか。それともただそこに留まっている日常に、ささやかな反発しているのかもしれない。誰にも邪魔されることなく、誰との協調も強いられることがないはずなのに。

そう思えるくらいに大袈裟でわざとらしい空のその濃い青色は、起きたばかりの鈍重な視神経にとつてはあらゆる意味で鮮明、あるいは強烈。

私は大きく息を吸い込んで再び目を瞑った。

もちろん突き抜けるような空の密度のせいではない。

早くこうしないと、ついさつきまで見ていた柔らかい夢の感が、尋常でない速度で収束を始めてしまうから。

きれいな小さい砂時計に閉じこめられた勤勉な意志に沿ってそれは収束してしまうから。

私はこうして大事な夢のいくつかを慎重に慎重に保管する。

この方法を私に教えてくれたあの人はきつともう生きていないだろう。

私はその事実を思い出す。

それから、自分の記憶の、その部分に触れてしまった自分に少し驚く。

自覚しているだけで、もう二年はその記憶に触ったことはなかったのに。

どうしてだろう。

そして昨夜のことが頭をよぎる。

いくつもの映像が頭の中で展開される。

しかしどの場面にも音声はない。

画像に比べれば音の方が小さい情報量で納めることができるのだから、当然覚えていないわけではない。

音を消したままの方がほんの少しだけ素敵だから。

しかし最後のシーンが現れる直前で、私は頭の中の無音劇を停止させる。

優しくそつと頭を撫でるような繊細さをイメージしながらプリーキをかける。

残ったのは球体のような無邪気な静けさ。

それからその姿勢のまま、首だけで周辺を見渡した。

どうやらここは緑々とした樹々に囲まれた小さな小さな草

原。

私はそこにぼつんと置いてある小さなベンチに座っている。周りには森がどこまでも続いていて見通しがよくない為、ちよつと離れたところですら何があるのかわからない。森が隠すことのできなかつた、建物の屋根だけが背後に見えた。

どうしてこんなところで寝ていたのであろう。

昨夜の出来事はあれだけ鮮明に覚えているというのに、眠ってしまったときのことは覚えていないなんて。

私はくすつと笑う。

そして、これまで私の周囲にいた人間と同じように、どうしてこんなところで生きているのかなんて疑問は一切抱かないようにしながら、私はここで眠るいつかの自分を思い出そうとする。

前者の方が遙かに難かしい問題だ。

どうしてもその疑問が頭から離れないとき、もつと正確には、諦められないときには、こう思うことにしている。

今からここで生きなさいと突然神様から命令されたのだと。

この方法もあの人から教えてもらった。

こういった疑問の放棄が標準的である人々の存在とともに。

私はあの人のことを思いだした自分にはもう驚かない。

自分を取り囲む物理的な条件と、表層に浮かんでいるこれま

での人生に対する認識だけを適当に把握して、自分がここで寝ていた理由だけに集中する。

こんなときはいつも、自分が寝てしまう瞬間をそつとピンで留められたら良いなと思う。

「千鶴子、起きたの？」

突然、すぐ近くから声が聞こえた。

私は思考に無理矢理ブレーキをかけて、声の主を確認する。

いや、確認するまでもない。

それは聞き慣れた声。

月邑日景。
つきむらのかげ

彼の声だ。

「もしかして僕が起こしたかな？」彼はすまなそうな口調ではつきりとそう言った。

私は驚いた。

彼のその口調のせいではない。

彼が私にその声で話かけたことに驚いたのだ。

しかし私はそれを表面には出さない。

こういった咄嗟の防御には慣れていて。

「いいえ、違います」私は日景に対して敬語で話すようにしている。

「それはよかつた」日景は微笑んだ。

何がよかったのだろうか。

きつと、自分が他人の安眠を妨げたわけではないということ
がわかったからだろう。

彼はそうした比較的平坦な思考をときどき私に向ける。

そんなときはいつも、私はそれを受け止めようとしない。

受け止めるだけの勇気が私にはないのだ。

「私を起こした者、それは何だったのでしょうか？」返事の代わりには尋ねた。

「僕にはそんなことわからないよ」日景は笑って首を振った。

ジョークだと思っただろう。

「ええ……、そうでしょうね」私は頷く。

「自分で起きたのではないの？」

「そんな器用なことではできません」私はほんの少し笑う。

「そうだね」日景は笑ったまま話した。「夢の中に比べれば、現実の方がちよつとだけ残酷だからね……、自分でこんなところに戻ってくる奴なんていない」

「でも私、その存在に感謝はしてるわ」

「千鶴子をこんなところに呼び戻した者に？」

私は首を縦に振る。

「感謝を？」

「ええ、多少は……」私はすぐに答えた。「でもそれは……、そ

の感謝はきつとその存在には届いていないのでしょう」

「どうして？」

「もしも届いていたらこんなことをするはずがないわ」

彼はそれを聞いてくすりと笑った。

「そうかもしれないね」

日景の座っているすぐ脇には古びたハードカヴァの本が一冊。

表紙の文字も掠れていてそのタイトルはほとんど読めない。

彼はどこに出掛けるときもこの本を持ち歩いている。そして独

りのときは大抵この本を読んでいる。

しかし今の日景はその本の存在を忘れてしまったように森だ

けを見ていた。

私はそつとその本に触れる。

そしてゆつくりと本を開いてみる。

「冬はいいね……」突然そう日景が呟いた。視線だけはまだどこか遠いところを向いている。

「どうして？」私は両手で本を支えたまま尋ねた。

「何となくね……」口もとだけで笑って日景は答えた。「生きていく心地がしないだろうか？」

「日景……」私は軽い調子で彼を呼ぶ。

それを聞いて日景は頷く。

それで私は確信する。

そして問う。

「日景が殺したんでしょ？」

彼は黙って頷いた。

1

私がラウール・リュミエールの屋敷を訪れたのは、ある意味でこれが初めてだった。

氏については、ときどき日景の話に登場することもあったし、何より私自身が彼と話をしたことがあったので、よく知っている。しかしこうして彼の邸宅に足を運ぶのはこれが初めてのこと

だ。日景からラウール氏を初めて紹介されたのは去年の冬のことだった。場所は確か、目眩を誘うような色調で彩られた古い喫茶店だったと思う。日景が私を誰かに紹介することは極めて稀なことだったので、あのときは本当に驚いた。しかしそれでも私は笑顔でその喜劇的な場面を乗り切ったように思う。次に彼と出会ったのはその翌週の私の夢の中。そしてその冬以来、彼が日本にやって来て日景のもとを訪れるたびに、私も彼と話を

したり食事をしたりするようになった。そういった意味では数少ない私の「知人」といえる。

しかし私は、例えばラウールがどんな仕事をしているかなどといった程度の比較的常識的な情報すら持っていなかったし、また、日景とラウールの関係も正確に認識しているとは思えなかった。

安易な言葉で表現しようとするならば、彼らは友人であろう。しかしそれは雪山の吹雪の一端を可憐な粉雪と形容するようなもので、嘘ではないが、とても誤差とは評価できないほどの威圧的な無理がある。

リュミエール邸はいくつかの山をそのまますっぽりと被覆してしまったその深く暗い森の中に建っていた。

私と日景は誰からも忘れ去られてしまったようなその静かな山道を歩いていた。

日景の方をちらりと確認する。彼はいつもどおり下を向いて歩いていた。それが外部から観測できる彼の数少ない癖。以前にどうして下ばかり見て歩いているのかと尋ねたことがあったが、そのとき日景は微笑みだけで何も教えてくれなかった。

「大丈夫？」日景が私に尋ねた。

「何がですか？」突然の質問に、私は少し遅れてきき返した。「生きてる？」彼は口もとを斜めにした。

「ええ」微笑んでから私は答える。

「それは良かった」

「安心なさいましたか？」

彼は小さく笑って頷いた。

「どちらへ？」

そのとき突然声が聞こえた。

あたりには誰もいない。それは周囲の観察を必要としないほどに明らかだった。

私たちが歩いているのはそれほどひっそりとした森。

声のする方に目を向けると、独りの少女が立っている。彼女は白いワンピースのドレスのような服を着ていた。両手で熊のぬいぐるみを抱えて、微笑んでこちらを向いていた。

誰もいないはずの森にこの少女。

印象はどこまでも淡く抽象的。

あまり平均的とは言えない状況に戸惑ってしまい、私は思わず口を開いてしまった。

「えっと……、貴女は？」

「私はこの近くに住んでいるの」ほんの少し間を置いてから、彼女はそう答えた。

「この……、近く？」私は呟く。

「私のことはいいの」少女は抑揚のない口調で言う。「どちら

へ？」

私を制するようにして日景が一步だけ彼女に近づいた。

「この先にある友人の屋敷です」

「そう……」初めて少女は表情を変える。

「それでは」日景はそう言っただけで軽く頭を下げると、再び進路に身体を向けた。当然、私もそれに従う。

「そちらは？」私たちの背中に向かって少女はそう問うた。

日景は振り返る。

「そちらの方とは結婚を？ それとも妹さんかしら？」

一瞬日景は目を見開いたが、すぐにいつもの表情に戻った。

「妹です」日景に代わって私は答える。

「一緒に行かれるの？」

「はい、もちろん」

「お気をつけて」

それから何故か私と日景はほとんど口をきかなかった。もちろん喧嘩をしているわけでもないし、どちらかが不機嫌だということも多分ない。濁った色で塗りつぶされたキャンパスのような空が気にはなっていたが、それも沈黙の原因ではない。何かの断片のような静寂を連れて、私たちは目的地に辿り着く。

「ここですか？」門の目の前で私は日景に尋ねた。

彼は私の問いには黙ったまま、その建物を見つめている。きつと「肯定」をもつとも小さいエネルギー消費量で示してみせたのだろう。そうするのがここではふさわしいという日景の態度に、私も屋敷の方に意識を向けた。

建物は私の想像どおり煉瓦造りで、庭木が邪魔になつて下部は見えないのだがどうやら二階建てのようだ。

門の奥から小柄な男が近づいてきたので、日景は足元に置いていた荷物を持つて門に近づいた。

「月呂様……、ですね？」

「初めまして」日景は微笑んで頷いた。

彼はこの屋敷の執事だそう。言葉の訛りで彼がドイツ人であることがわかった。

執事はハインツと名乗った。

彼に従つて私たちは大仰な門をくぐり、屋敷の敷地に足を踏み入れる。

執事は初老の紳士。髪は全体的に白い。まったくしわのないその黒いタキシードのような衣装とのコントラストが極めて印象的だ。

庭もどうやら広いらしく、建物の側まではまだずいぶん距離がある。何もかもが拡散してしまいそんな大きな山自体が庭のようなものだから、敷地は狭くても良いのではない

かと私は思った。門や扉の存在に実質的な意味が見いだせない。もしかしたらこれがあの邸宅の住人の「遠慮」という意志なのかもしれない。

「天気が悪いですね……」歩きながら日景は執事に話かけた。

「そうですね」彼はちらりと空を仰ぎ見るとすぐに視線を落とす。「今夜は雪かもしれません」

「寒いですからね……」

「しかしこの空模様ですと、明日はきつと晴れるでしょう」彼は上品に微笑んだ。「この季節ですから、暖かいとまではいきませんが、近くの森を散歩なさるくらいはできるかと」

「わかるのですか？」日景の口調を真似て私が尋ねる。

「ええ」執事は頷く。「何となくわかります」

「もうここに来て長いんですか？」

「そうですね……」遠くを見るような目をしてハインツは答える。顔にはゆつたりとした笑みが浮かんでいる。「もう四十年以上にもなりますか。シリル様がこちらに移られた頃からおります」

シリルとはラウールの父親、シリル・リュミエールのことだろう。

「街には出られないのですか？」私はきいた。

「私は滅多に山から下りません」

「ずつとここには不便では？」

「いえ」執事は首を振った。「もうこの歳になりますと、どこにいてもそれほど大差はございません」

丁寧に並べられたのであろう石畳に沿ってしばらく庭を歩いていると、ようやく建物の側に着いた。

それはやはり二階建てだった。しかし目の前に佇む建築物は少なくとも私がこれまで見てきたそれとは外面から異なっていた。

玄関で直角に交わる二枚の壁が、左右それぞれ向かって斜めの方向に続いている。玄関はどうやら建物の一つの角に位置しているようだ。裏側がどうなっているかわからないが、もしかしたら真上から見ると三角形あるいは扇のような形をしているのかもしれない。

ほんの数段しかない階段に導かれるようにして、道は玄関へと続いている。そこまで近づき、ハインツが扉を押す。低く鈍い軋んだような音をたてながらそれは開いた。

「どうぞ」ハインツの声が響く。

扉の奥は人が六、七人も入れればいっぱいになってしまいそうなる狭いスペースで、その正面にもう一つ扉があった。今度の扉は玄関ほど大きくない。開くときに発せられる音も小さく、執事によって何の抵抗もなく開いた。

そこは円状になっている壁に仕切られた、ロビーのような空間だった。

正面と、そこから大体六十度くらいのところに左右それぞれ木製の扉がついていて、入ってきたすぐ右手には壁のなす円周に沿うようにして二階へと上がる階段がある。部屋の中央にはソファが置いてあった。これといって目立つた調度品は見当たらず、落ち着いた印象を与える。この類の品の良さは大事にしてもらいたいものだと思う。

「月邑様のお部屋はこちらです」

こちらに向かつてそれだけ言うと、執事は階段を上がる。私たちもそれに従う。

「まだどなたも到着なさっていないのですか？」日景が執事に尋ねた。一階の様子を見ての発言だろう。

「いえ、月邑様以外のお客様はもうこちらにいらっしやいます」上品な口調で執事は話す。「どなた様も部屋で休まれております」

階段を上がると、そこもロビーと同じように円で切り取られたスペースになっていた。ロビーからここまで、私たちは大きな円柱形の中にいたことになる。こちらにはソファはなく、たった二脚椅子が置いてある。一階では扉が設置されていたところからそれぞれ廊下が伸びていた。私たちは向かって右の廊下に

進む。

「こちらが月島様のお部屋になります」

右壁に部屋が二つ。奥の方の部屋の前で執事はそう言った。

「食事の準備ができましたらお呼び致します。それまでこちらでごゆっくりと」

2

軽いノックの音が廊下に響く。

ハインツが持つてくれた荷物を部屋に置いてきた私と日

景は、ラウールに挨拶をする為に部屋を出た。

「彼と会う準備は大丈夫？」 日景は私に尋ねる。

「準備ですか？」

「ああ……、準備」

「そんなものが必要ですか？」

「さあ、どうなんだろう？ 必要な人がいるかもしれない」

「どういうことでしょうか？」 私は意味がわからなかったので素直にきいた。

「誰に会うにしても心の準備が必要な人がいるかもしれないじゃないか」日景は答える。「一応、念の為に確認しただけだよ」

「私には必要だと言いたいのですか？」

「そうは言っていない」

「そもそも心の準備なんて可能ですか？」 私は冗談っぽく言った。

執事に教えてもらったとおり、階段のところまで引き返して、今度は中央の廊下に向かった。

突き当たるとそこには部屋が二つ。右がラウール、左がシールの部屋だそうだ。

日景が再度ノックしようと右腕を上げると、部屋の扉は怖ろしいほど大きな音をたてて開いた。その音に、私は思わず顔をしかめる。

ラウール氏が現れた。

「やあ、ヒカゲか」彼は表情を変えずに言う。「どうぞ」

通された部屋は彼らしく殺風景なところだった。

「遠いところわざわざ来てくれてありがとう」窓際に置かれている椅子に腰掛けたラウールは不機嫌そうな調子でそう言った。

私たちは彼の正面に位置する椅子に座る。

ラウールは日景と同じ歳だが、落ち着いているその風貌のせいなのか、彼の方がずっと歳上に見える。自分の屋敷にいるというのに、彼はスーツにネクタイだ。

いつもどおりの愛想のない表情。彼はこれが平静なのだ、

知らない人間が見たら間違ひなく機嫌が悪いと判断するだろう。眼鏡の奥に見える目つきは鋭く、何も言わなくても相手を威圧してしまう。何かを拒絶しているような冷たくシャープな雰囲気。実際、私も彼が笑っているところなどほとんど見ることがない。

「チツコ・ツキムラも久しぶりだ」何故だか彼はいつも私をフルネームで呼ぶ。

「月丘千鶴子です。お久しぶりです」私は頭を下げた。「今夜はご招待いただいて、こちらこそありがとうございます」

ラウールは神経質そうに眼鏡に触れてから頷いた。

「忙しいところすまなかった。何か、していたところだったのかい？」ノックをしてもすぐに出てこなかったからなのか、日景はラウールにきいた。

「いや、忙しいはない。ここでは仕事はしないんだ」

「そうだったね」それから日景も遅れて招待への感謝を述べた。

ラウールの背後にある窓から見える暗い森が妙に印象的。

それから私は再びラウールに視線を戻した。

「向こうの部屋にいてね、ノックが聞こえなかった」どこか含みのあるような言い方。ラウールはそう言って片手を上げた。

ラウールの示した方向を日景は見た。扉が開いていた。

何も言わない日景を不思議そうに見つめながら、ラウールは

椅子に深く座り直した。

「ヒカゲはあの部屋が何の部屋か知らなかったか？」

「ああ、知らない」目を丸くして日景はきき返した。

「そうだったか……、あのときはあそこに入らなかったのか……？」独りで呟くようにラウールは言った。

俯いて何かを思い出しているような仕草のラウールを、日景はよくわからないといった調子でしばらく見つめていた。緊張感の希薄なこの膠着状態が気に入らなかったので私は口を開いた。

「あそこは何の部屋なのですか？」

ラウールははつと顔を上げた。

「アキの部屋だよ」

「彼女の部屋？」日景がくり返す。

ラウールは黙って頷いた。

アキとはアキ・リュミエール、彼の夫人のことだ。

「どうして彼女の部屋に？」日景がきいた。

その問いには何も言葉を返さず、彼は日景の方をじつと睨むように見つめている。答えないのでなく、それが答えだと主張するような表情。

「あれからも何年になる？」日景が質問を変えた。

「二年だ」歯切れのよい口調でラウールが答えた。

「まだたったの二年か……」何かを思い出すように日景が呟いた。「もうずいぶん昔の話のような気がするんだが……」

二年前。

リュミエール夫人が亡くなったのだ。

「犯人は？」と日景。

ラウールは首を横に振る。

リュミエール夫人は二年前の冬、この屋敷で亡くなった。

しかも何者かによって殺されたそうだ。

犯人はいまだに捕まっていない。

そのとき日景も今回と同じように、パーティのゲストとしてこの屋敷にいたのだ。

「どうして彼女の部屋に？」同じ質問を繰り返した。

日景は絶対に彼女の名前を口にしようとはしない。私は何となく理解できたので、その理由を本人に尋ねたことはない。

「特に理由はない」早口にラウールは答える。

その返答に日景は軽く溜息をついた。

リュミエール夫人は日本人である。

そもそも彼女は月邑日景の友人であった。

いや、それがただの友人だったらただけ良かったことか。

私はそう思う。

私は日景が彼女と親しくしていた頃のことを知らない。その

頃の私はこうして日景の側にはいなかったのだ。それは今のように私と日景が不可分になる前の話なのだ。

「そうだね……」日景は天井を見上げながら言った。「理由がない必要はない。そのとおりだよ」

背後からノックをする音が聞こえた。

ラウールは立ち上がり私たちの横を過ぎて扉まで近づく。

「取り込み中かな……？」

廊下に立っているのは金髪の男性。歳は三十代の半ばくらいだろう。少なくとも日景やラウールよりは歳上であろう。男はどこか申し訳なさそうな顔をしていた。

「取り込んではいないよ、アルマン」ラウールはそう言う。こちらに振り返る。「紹介するよ」

その男性を部屋に通してラウールは再びもとの位置に戻る。私たちは立ち上がった。やはり彼はにこりともせず、男性に日景を紹介する。

「私はアルマン、アルマン・ゼビナです」アルマンは微笑みながらそう言う。片手を差し出した。笑みは爽やかなのだが、その裏にはこの世代特有のあの妙な影が感じられる。

「ツキムラさんはもしかして日本人？」

「そうです」彼の右手を握りながら私は答える。

「では例のラウール氏のご友人というのはこの方ですね？」ア

ルマンはラウールを見てそう尋ねる。ラウールはそれには反応せず黙って私たちを見ている。何が「例」なのか、私にはさっぱりわからなかった。多少失礼な表現だとも思ったが、面倒だったしあまり深入りしたくなかったので私は何も言わない。

「じゃあ僕たちは部屋に戻るよ」日景はラウールにそう告げた。「また食事のときに」

私と日景は扉に向かった。

3

「疲れました。少し寝ます」

ラウール・リュミエールの部屋から戻ると、私は日景にそう言っただけ目を閉じた。

特に気を遣ったわけではない。

確かにリュミエール夫人の話をしていたときの日景は、いっぴくに精神状態が不安定だった。これは彼にとつて非常に珍しいことだ。だから私も日景に対してどう振る舞えば良いのか、よくわからなかったというのも事実である。

しかし、それならばそれでお互いに黙ったまま、誰よりも律儀に流れているその時間を共有していればすむことだ。実際、私と日景は大抵そうした今にも小刻みに震え出しそうな沈黙の

中で互いを捉え合う。

だから。

そう。

ただ私はこの空間で眠りたかったのだ。

ただそれだけ。

そのことを何故だか強く意識して私は眠る。

目を瞑る。

深く沈んだところに拘束してある私の平穩には途端に光が届かなくなる。

弱々しい深海魚を連想させる私の平穩はいたるところが脆弱。

夢の中。

原色にはないゆらゆらとした曖昧な刺激。

夢の印象は大抵いつもその程度。

しばらくして執事が現れた。彼が扉を叩く音で私は目覚める。私は思わず壁に掛かっていた時計に視線を送った。午後六時少し前。一時間半近く眠っていたことになる。

食事の準備ができたそうだ。その報告を受けた私と日景は一階の食堂に向かった。

「何をしていたのですか？」階段を下りながら、周囲には聞こえないように私は日景に尋ねた。

「本を読んでいた」日景も同じように、私だけに聞こえるように答えた。きっとそれは彼がいつも持ち歩いているあの古い本のことだろう。

「そうですか」私は無意味な相槌をうつ。

「ああ……」日景はそこで少し時間をとってから続けた。「千鶴子が心配するようなことは何もないよ」

心配。

私は心配していたのだろうか。

そうだとしたら何を心配していたのだろうか。

月邑日景。

私はこの兄のことを心配したことなどきつと一度もない。自分の尾を口にしてしまった蛇のような抽象的な循環を極度に恐れている私は、元来こういった自己分析が苦手だ。しかし、それでもそれは正しい認識だと思う。

アキ・リュミエール。

私の知らないその女性はもう生きていない。

ラウール・リュミエール。

あの抑制された冷たく尖った意志は何なのだろう。

階段を下りる。

ロビーに到着し、玄関から向かって正面の扉を開けるとそこが食堂だった。

食堂は入り口を中心とした扇のような造りになっていて、奥に行くほど広い。その扇を二分割するように、長方形の大きなテーブルが縦に配置されていた。

先ほどラウールの部屋で出会ったアルマンという男はすでに席に着いていた。その正面には上品な細身の女性が座っている。どうやら二人は初対面ではないようで、何か笑いながら小声で話をしていた。

席は決まっているのだろうか、どこに座ろうか、と考えながらゆっくりテーブルに近づくと、後ろの方から扉の開く音が聞こえた。私たちは振り返る。ラウールだ。そして彼の隣には小柄ながらラウール以上に威圧的な空気を感ぜられる老いた男。きつとあの老人がラウールの父、シリル・リュミエールである。

私たちはラウールに従って席に着く。

「お待ちせした」人間の可聴領域ぎりぎりなのではないかと思えるほどの重い低音でシリルは言う。

それを合図として、乾杯も挨拶も紹介も何もなく、食事は始まった。

私はテーブルに着いている人間を確認する。

どうやらこの広間に到着した最後のゲストが私たちだったようで、リュミエールの二人を除けば他にはアルマンとあの女性

だけ。

縦に置かれたテーブルの窓側の短い辺、部屋の形状である扇を形成する弧の中心あたりに位置しているのが、シリルと思われる老人。彼はその場にいる誰とも目を合わせず黙々と料理に向かっている。

シリル以外はそれぞれテーブルの長方形の長い辺に着いている。

この屋敷にはハイנטツの他には使用人がいないらしく、彼が食事の用意をしているようだ。給仕も彼が独りでこなしている。

食事中はほとんど誰も口を開かなかつた。

いくつかの料理が断続的に目の前に置かれる、あまり慣れない形式の食事。食器が触れ合うときに微かに生じる乾いた音だけが広間を支配する。

しかし雰囲気は不気味などというよりは、厳粛と呼ぶにふさわしいものを感じられた。

食事が終わると早々にシリルは立ち上がって広間を出ていった。

結局私が聞いた彼の声は、あの食前の一言だけだった。

「お父上は相変わらずですね」苦笑したアルマンがラウールに向かって小声でそう告げた。それに対してラウールは無言でアルマンに頷いた。やはり彼がシリル・リュミエールだったよう

だ。アルマンはシリルにも面識があるのだろう。

「ラウールさん、こちらの方を紹介してくださいませんか？」アルマンの正面に座っている女性が私たちを見て言った。想像していたよりもずっと高い声だ。

「そうですよね……」ラウールはそう言うのとさっと立ち上がって、簡単に紹介をした。

女性にはティアアナ・ボルネフェルトという名前だそうだ。二代前半くらいだろう。ラウールの紹介は本当に簡単なもので、彼との関係、つまり今日のパーティに彼女が招待された理由にはもちろん触れられなかった。

「よろしくお願いします」ティアアナは微笑んで握手を求めながら言った。

私と日景は彼女の手を握った。

「何をよろしくなのでしょうか？」丁寧な口調で日景が尋ねた。

「まあ」ティアアナは大袈裟に目を丸くして声を出した。「おもしろそうな方ね」

ハイנטツが食後の紅茶を運んできてくれた。

それからしばらくは再び誰も何も喋らず、皆が黙ってカップに口をつけていた。

「雪だ……」窓の方に視線を向けたラウールが突然呟いた。それを聞いて、全員が窓の外を見た。

彼の言うとおり、窓の外では白い小さな雪がいくつもいくつもその暗闇を軽やかに駆けている。

「今日は昼から天気が悪かったですからね」アルマンが言う。

「外は随分と冷えていましたし」ティアナは身体を縮めるような仕草をした。

私はその雪を見て、庭でのハイנטツとの会話を思い出した。

彼は明日は晴れると言っていたが本当だろうか。その柔らそうな雪々を見たばかりの私には、そんなことはとても信じられなかった。

「このお屋敷、山の奥深くにあるでしょう？」ティアナはラウールに尋ねる。「もしも雪がたくさん積もったりしたら、この山に閉じこめられたりするんじゃないかしら？」

「大丈夫です」ラウールはそれだけ言うと、自分のグラスに触れた。ここでほんの少しでも微笑むことができたら、と私は余計なことを考えた。

「もし身動きが取れなくなってもこの屋敷にいれば大丈夫ですよ。食料も充分にあるでしょうし」アルマンは冗談っぽくそこまで言う、背中を丸めて声を小さくして続けた。「それに……、この雪なら殺人鬼も屋敷に寄ってこないでしょう」

「殺人鬼？」その言葉にびつくりしたのかティアナが繰り返す。

「ええ……、殺人鬼です」

「何ですか？ それは」眉をひそめてティアナはきいた。

「二年前のあの事件はまだ未解決なんですよね？」アルマンはラウールに尋ねる。

ラウールは頷いた。

「二年前の事件というのは？」ティアナは怪訝な顔つきで聞いた。「二年前に何かあったのですか？」

私はこっそりと日景を見る。しかし彼は表情を変えないで話を聞いている。

「あれ？ 貴女は知らなかったですか？」どこか楽しそうにアルマンは言った。そう聞こえたのは私の誤解かもしれない。「二年前の冬、ここで殺人事件があったんですよ、ボルネフェルト嬢」

リュミエール夫人が殺されたあの事件。

「まあ……」ティアナは顔をしかめて呟いた。

「ツキムラさんはご存じでしたよね？」アルマンが私たちの方を向いてきいた。

「ええ」日景が答える。やはり彼は無表情だ。

「それがですね、犯人がいまだに捕まっていないそうなんですよ……」アルマンが説明をする。「もちろん二年もたつてまだこの近くをうろついているなんて思ってもいせんがね……、やっぱり……」

「アルマン」ラウールが立ち上がったって何かを断つような調子の声を出した。「私はあまりその話を聞きたくないんだ。できれば止めてくれないか？」

アルマンは急に申し訳なさそうな顔になって頭を下げた。

「そうだね……。君には気の毒な話だ。悪かった。すまない」

それを聞いたティアナは目を丸くして落ち着きのない表情になった。きつと彼女は何も知らないのだ。それを見て、私は何故だかちよつと羨ましかった。

ラウールはまた椅子に腰掛け直すと、首だけでこちらを見てきいた。

「ヒカゲもこんな話は聞きたくないだろう？」

アルマンを見ていた日景はラウールの方に向き直る。

「ああ……。聞きたくないね」

日景はそう言いながら、微笑んで頷いた。

4

すぐ枕元の窓の外から、雪の音が秘密を囁くようにひっそりと聞こえてくる。

食事の前に眠ってしまったせいなのか寝付けない。今日一日中動かしていた身体だけでも休めようとしてしばらく横になって

たのだが、それにももう飽きてしまった。

日景が寝ていることをそつと確認する。

あの冬、リミュエール夫人が殺されたときの日景はどんな様子だったのだろうか。

大事な人間を殺されたときの日景。

私にはまったく想像することができない。

また、夫人を失ったラウール・リュミエールを見たときの日景はどんな様子だったのか。

精神構造、いや、私自身の存在の構造が抱えている問題で、自分の生に対する執念が元来希薄な私。

この私がいなくなったら日景はどうするのだろうか。

部屋の時計を見る。時刻は午後十一時を過ぎたところだ。

私は空気が震えないようにゆつくりと部屋の扉に手をかける。木製の扉も萎縮してしまったこの静寂を保つことに協力的な様子で開いた。

廊下を歩く。

こちらの廊下には客室が二つ。隣の部屋は空室のようで物音は一切しない。階段が上がったところから左側の廊下にも、このこと同じように客室が二つあり、それぞれがアルマン・ゼビナとティアナ・ボルネフェルトの部屋なのだろう。

そこで先ほどの食堂のことを思い出す。

アルマンの話がラウルによって遮られてから食堂には重苦しい空気が流れた。

広い食堂にぼつんと置かれたテーブル。

それ以外はそこには何も置かれていない。

いつもなら好ましいそんな殺風景が妙に誇張された雰囲気。

シリルが部屋に戻っていたので、私たちは全員、それぞれ誰かと向かい合うようにして座る格好となっていた。しかし誰もお互いと視線を交わそうとしない。

それから少ししてラウルが挨拶をして立ち上がったのを契

機に私たちは全員、各々の部屋に戻った。

そこに残ったのはテーブルとたった五脚の椅子。そして無色

の拒絶を連想させるなめらかな空虚。

階段のところまで歩いた私は、そこに誰かがいることに気が付いた。椅子に誰かが座っている。廊下が暗かったので遠くからではわからなかったが、そこにいるのはティアナ・ボルネフェルトだった。

「あら……、こんばんは」少し舌の足らない発音でティアナはそう挨拶した。手にグラスを持っている。何か飲んでいるのだろう。明らかに食事のときとは違う口調だ。

「こんばんは」私は返した。

彼女は焦点の合っていないような目で私の方を見ている。

「ツキムラさん……、よね？」

「はい」私は頷く。

それを聞いてティアナはくすくすと笑い出した。

「はい……、ですって」

何がそれほどおかしいのか私には理解できない。

「お急ぎかしら？」彼女は尋ねる。

「いえ、それほどでも……」私は控えめに答えた。

「少しだけお話に付き合ってくださいさらない？」聞き取りにくい

発音でティアナは言った。

私は黙ってティアナに近づくと、彼女の座るその椅子の正面

に立った。

沈黙。

「何でしょうか？」先に耐えられなくなったのは私だった。私は目の前のティアナにそう尋ねる。もともと、彼女はこの沈黙に耐えているという認識は持っていないだろうが。

「何でしょうか、って？」ティアナはきき返した。

「お話です」私は答える。「貴女が付き合ってほしいというお話

です」

「ああ……、それね……」ティアナは納得したという表情で何

度も何度も頷いた。「貴方も何か飲まれる？」

「結構です」

「あら、冷たい言い方……」そう言つて彼女はまた小さな声で笑つた。

「話がないのでしたら、私はこれで失礼します」

「本当に冷たいのね……」不満そうに頬を膨らませてティアアナは手を振つた。「もういいわ。行つてらっしゃい……、神の加護を祈つてあげるわ」

私は酔つたティアアナを無視して進行方向を中央の廊下に向けた。

二つの扉が並んでいる。

暗い静かな廊下。

深い闇に沈んだ廊下。

そこで私は後ろにいるティアアナがほんの少しだけ気になる。

彼女は大丈夫だろうか。

いや、それ以前に私は大丈夫なのだろうか。

そこで私は軽く深呼吸をした。

もしかしたらこれが心の準備なのかもしれない。

私は独りでくすつと笑つた。

多少余裕がある証拠。

それから向かつて右側の扉をノック。

「あいています」冷たい口調。「どうぞ」

それを聞いて私は自分の中の覚悟を自覚する。

そしてゆっくりと扉を開く。

日中と変わらず、扉は廊下に悲鳴を響かせた。

「夜遅くに申し訳ありません」私は入るなりすぐさまそう謝罪した。

ラウール氏は日中とまったく同じような姿勢で、窓際の椅子に腰掛けて本を読んでいたようだった。室内は静かで、カーテンが掛かつていて外は見えないが、ここでも雪の降る音が聞こえてくる。私はそれをじつと聞いていたいという衝動を抑える為に再び大きく深呼吸しなければならなかった。

「チツコ・ツキムラか……」空気がそう軽く振動する。

「兄のことで少しお話がしたくて参りました」私は歯切れの良い口調を心がけて話した。「迷惑でしたら率直に仰つてくださ

い。直ちにここから出ていきます」

「ヒカゲは？」ラウールは尋ねた。「ヒカゲはどうしたんだ？」

「兄は寝ております」

「本当に？」

私は力強く頷く。

それを見てラウールは口もとを斜めにした。

「別に迷惑ではないよ、チツコ・ツキムラ」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

ラウールは近くの机に持っていた本をゆっくりと置いて、私

に正面の椅子を示した。私はそこに深く腰掛ける。それから彼は無言で私に話を促した。

私は切り出す。

「二年前、このお屋敷で件の殺人事件が起こったときの兄の様子を伺いたいのですが……」

彼はそれを聞いて珍しく小さく微笑んだ。少なくとも私にはそう見えた。

「それをきいてどうするつもりだい？ チツコ・ツキムラ」

私はそれには何も答えない。鈍重な沈黙が瞬間、室内に充滿する。

「まあ良いだろう……」

そう言つてラウールは頷くと、立ち上がつて部屋の中を歩き始めた。私は黙つてそれを見ている。

「これはあくまで私の感想だ」とてもゆつたりとしたペースで歩く彼はそう前置きをした。「もちろん本人に尋ねたわけではない。純粹に……、ただ単純にあのときの彼を見て私が思ったことだ……」

私は頷いた。しかしそのとき彼は後ろを向いていたのでそれは見えなかつただろう。

「一言……、たった一言であのときのヒカゲを説明するならば……」彼は言った。「ヒカゲはきつと喜んでいたらと思つ」

喜んでいた。

アキ・リュミエールが死んで日景が喜んでいた。

ラウールは確かにそう言った。

「どういうことでしょうか？」

「どうもごうもない」ラウールは答える。「確かに彼は彼女の死を悲しんでいたし、その何者かの意志に脅えてもいた。しかし……、しかし彼はあのとき、喜んでいたらのだと……、私はヒカゲを見てそう思つた」

日景が喜ぶ。

彼女の死を喜ぶ。

私にはその言葉の意味が理解できない。

「チツコ・ツキムラはヒカゲとこれだけ一緒にいるのに、本人に直接尋ねたことはないのか？」

「ありません」きつぱりと私は答えた。

「何故？」

「何故……？」

「どうしてチツコ・ツキムラはヒカゲに直接それを尋ねないのだ？」

「それは……」私は歯切れがよくないことを自覚する。「それはわかりません」

何故。

どうして私は日景に尋ねようと思わなかったのだろう。

確かにそんなことは考えたこともなかった。

「彼は喜んでいたんだよ」ラウールは再びそう言った。「アキが死んで……、その亡骸を見たヒカゲは……」

私は日景とリュミエール夫人の話をしたことがない。

それは何故か。

そもそも彼女のことをこれほど考えたことも今までなかったように思う。

この屋敷に来なければこの先もずっとそうだったかもしれない。リュミエール家のこの屋敷に来なければ。

「兄は……、兄はどうして私をここに連れてきたのでしょうか？」

「何だい？」よくわからないと言う表情でラウールがきき返した。

「私は……、兄が私をここに連れてきた理由もわからないのです……」

「それは本人にきいたら良い」ラウールは言う。「それは私にはわからない」

私はラウールの表情が変化したところを見逃さなかった。「何か心当たりはございませんか？」

「ない」ラウールは断言した。「パーティに彼を招待したのは当然私だ。その際、チヅコ・ツキムラの同伴ももちろん認めた。

それは事実だ。しかしヒカゲが君を積極的にここへ連れてきた理由となると……、そんなことは私にわかるはずがないだろう？」

私は強い視線で彼を見据えて尋ねる。

「本当ですか？」

「本当だ」彼は即座に答えた。

私は話の方向を変えることにする。

「あの事件の犯人は……、犯人はいまだ捕まっていないのですよね？」

「そのとおりだ」

「失礼かもしれませんが……」私は遠慮した口調で聞いた。「殺害現場はどこですか？」

何も言わず、彼は目だけでそれを私に伝えた。

彼の視線の先にはアキ・リュミエールの部屋。

それは彼女の部屋。

「彼女が亡くなったそのとき、貴方はどこで何をなさっていたのですか？」ラウールに向き直って私は質問をぶつける。

そこで彼は黙った。

神様が立っている方角を探している老人のように黙った。

「教えてはいただけませんか？」

諦めたような顔をするラウール。

彼はほんの小さな声で答えた。

「ここにいたよ……」

「ここに？」 私は思わずくり返す。

「ああ……」 ラウールは答える。「ここにいた」

「それでしたら……」 私は必死にラウールに訴えた。「それでしたら貴方は犯人を知っているのではないですか？」

彼は答えない。

「あの部屋で夫人は殺された」件の部屋を示して私は言う。「そして貴方はここにいた……」

私はそこで一息ついてから先を続ける。

「従つて貴方は犯人を知っている。そうではないですか？」

彼は顎に手を当てて何かを考えているような仕草をする。

「従つて私が犯人を知っている、か……」

私が興奮して思わず口にした英語をそっと訂正すると、ラウールは悲しそうな表情で俯いた。

「それは誰ですか？」

その質問が部屋に響く。

そして再び静寂。

二人の沈黙に塗り直された静寂。

ラウールは夫人の部屋を直視する。

時間が拘束されてどこにも進めない。

そんなふう感じられるほど鈍重で停滞した空気。

ラウールが再び椅子に戻った。

その動作は私を知る彼の動きの中でもっともゆつたりとしたものだった。

「これはこだけの話だ……」彼は大きく溜息をつく。「それは君だけには教えるでしょう」

そこでラウールは今度こそ本当に微笑んだ。それはぞつとずるほど透明な微笑みだった。

「二年前、この屋敷でアキを殺したのは……」

それを聞いて私は一瞬気を失った。

5

ラウール・リュミエールが何者かによつて殺害された。

その事実を聞かされた私は、身軽な動作でベッドから起き上がった。

私たちにそれを報せたハイנטツは慌てて部屋を飛び出していく。

きつと朝から彼は大忙しなのだろう。

起きたばかりのぼんやりとした頭で、私はそんな悠長なことを考えた。

「今の話、聞いたかい？」日景が少し興奮したような調子で話しかけてきた。これが正常な反応だろう。

「この距離ですから……、聞こえました」私は努めて平静に答えた。

日景は黙った。

私も何も言わない。

「千鶴子、君は驚いていないの？」少し間を置いてから彼は当然の質問をした。

それには答えなかった。

もちろん私は内心でも驚いていた。

ラウル・リュミエールが殺された。

その言葉が頭の中でくり返される。

私が彼を殺していないということは確かだ。

それは私がよく知っている。

その事実が私の精神をこうも安定させている原因だろう。

そして。

私は何となくこうなることを予測していたのだとも思う。

そうでなければこれほど冷静でいられるはずがない。

死んだのは昨夜二人だけで会話をした人間なのだから。

ラウルの部屋を出た後、私はたった独りで部屋に戻った。

その間、日景はずっと寝ていたようだ。ラウルとあんな話をした後だったせいか、自分の部屋に戻る道中、もしかしたら廊下でひょっこり日景が現れて私に声をかけるのではないかと、という奇妙な想像をしていたのだが、そんなことはなかったのだ。「日景……」私は昨夜ラウルの部屋で二人だけで話をしたこととを正直に述べることにした。

彼は二人の会話の内容をきこうとはしなかった。

どうすれば良いかわからない私たちは、一階の広間に降りることにした。

昨夜からテーブルの位置はまったく変わっていない。

そんな当たり前のことが頭の中で確認される。

アルマン・ゼビナが昨日の夕食時と同じ椅子に着いていた。食卓にいたのは彼だけだ。私たちもテーブルまで歩き、昨夜と同じ椅子に腰掛けた。

「おはようございます」日景がアルマンにそう声をかけた。

「ああ……、おはようございます」

アルマンは曾えたような表情をしていた。

「聞きましたか……？」小さな声で彼は質問をした。きつとラウル殺害のことだろう。

私たちは無言で頷く。

「大変なことになりましたね……」

確かに大変なことだ、と私は思う。

ハインツから話を聞いたのだろう、それから彼は私たちに状況を説明してくれた。

ラウールは自室、正確には彼の亡くなった夫人の部屋で殺されていたそうだ。

それを聞いて私は昨日日景とラウールに挨拶に行つたときのことを思い出した。

私たちが部屋を訪れるまでラウールがいたというアキ・リュミエールの部屋。

そしてそこはアキ・リュミエールが亡くなった部屋。

「どうして彼女の部屋に？」

そう彼に尋ねた日景。

その場面が一瞬だけ頭をよぎる。

最初に遺体を発見したのは執事のハインツだという。彼が今朝、いつものようにラウールを起こす為部屋に向かうと、どれだけ扉をノックをしても返事がない。おかしいと思つたハインツが部屋に入ると、その中にある彼の夫人の部屋でラウールが亡くなつていたところを目撃したそうだ。

凶器は小型のナイフ。ラウールはその部屋にあつた椅子に座つたままの格好で殺されていて、ナイフが彼の左胸に突き刺

さつていた。

扉が開く音がした。

ハインツが食堂に入ってきたのだ。それを見て不謹慎ながら私は、息子を失つたシリルが登場するよりは気が楽だと思つた。

「あの……」近づいてきたハインツが私たちに話しかけた。乱れた呼吸の奥からも礼節を感じさせるところがさすがだ。「お客様方にこのようなことをお伺いするのも何なのですが……、ティアナ・ボルネフェルト様をご存じないですか？」

日景とアルマンは思わずといった感じで顔を合わせた。

「いえ……、僕は知りませんが……」先に答えたのは日景だった。それから日景は再びアルマンを見る。

「私も知りません」アルマンは言った。

きつと予想していたであろうその返答にも、ハインツは困つたという顔をした。

「彼女、部屋にいないんですか？」私が尋ねた。もちろん私もそこまで馬鹿ではないので、本気でこの疑問を持っていたわけではない。

「それが……、どこにもいらつしやらないのです……」

彼はそれだけ言つてまた早々と部屋から出ていつてしまつた。

「まさかティアナさんまで……」アルマンが小さな声でそう呟

いたのが聞こえた。

昼頃、警察が屋敷に到着した。山の奥深くにあるこの屋敷の位置を考慮すると、それはなかなか迅速な対応だったと評価できらるろう。

そのとき私たちはハインツの用意してくれた朝食を食べ終え、部屋で休んでいたところだった。朝食時、シリルは食堂には来なかった。彼は朝食は自分の部屋で食べるのが習慣だそう。

そしてとうとうティアアナ・ポルネフェルトは現れなかった。

警察が来たということで、私と日景は再び広間に戻る。

広間にはたくさんの警察官が待機していた。現場を調べたり関係者に話をきいている者もいるはずなので、この屋敷までやって来た警察官はこれだけではないだろう。やはりリユミ・エール家に関わる事件ともなると彼らも手が抜けないのだなど私は妙な感心をした。

事情聴取は二階の空き部屋、つまり私たちが滞在している隣の部屋で行われているようだ。順番を待っている間、忙しなく動く警察官たちの中で、ハインツの用意してくれた紅茶を飲みながら窓から外をぼんやりと眺めていた。

事情聴取は私たちが最後だった。

刑事は一目でこの国の人間だとわかる風貌の男だ。最初に名

前を聞かされたが、即座に忘れてしまった。

「それで……」

そう刑事が切り出したので私たちは昨夜の行動を彼に説明した。

「ということは貴方は昨夜、ラウールさんの部屋に訪れたのですね？」 刑事は確認をした。

私は首を縦に振った。

「それは何時頃ですか？」

「十一時を過ぎたあたりだったと思います」 自分の部屋を出る際、確かそれくらいの時間だったと記憶しているので、そのとおりに告げた。

「そうですか……」 意味深に頷く刑事。

私は無言で説明を求めた。

「それがですね……」 刑事は言った。「昨夜この屋敷にいた人間……、被害者も加えた六人であるうが、あるいは外部の人間だろうが……、とにかくツキムラさんとラウールさん以外にあの部屋を出入りできた人間はいないんですよ」

「それはどういうことでしょうか？」 私は驚いてきいた。

「シリル・リミユールさんの証言なのですが……」 刑事は説明する。「あその扉……、ラウールさんの部屋の扉なのですが、あれは開くととんでもなく大きな音がするんですよ。貴方もそ

れは知っているでしょう？」

「そう言えば……、そうでした」日景は頷いた。私もそれは知っている。

「それですね、シリルさんが仰るには昨夜遅くに……、大体深夜の十一時半あたり、それからほぼ三十分くらいしてから、その扉の開く音が聞こえたそうなのです」

その時間ならば間違いないどちらも私だ。

「先ほど実験をしましたが、あの扉はどんなにゆっくり慎重に開いても悲鳴のような音を出しませんよ。それで……、シリルさんのお話ですと、昨夜あの扉が開いたのはその二回、たつたの二回だったそうなんです」刑事はそこで私たちを厳しい目つきで見た。「この状況、ご理解できますよね……？」

そのときだった。

部屋に誰かが入ってきた。警察の人間だ。私たちに事情をきいているその刑事に耳打ちで何やら報告をすると、突然現れたその男は黙って部屋を出ていった。

刑事はいよいよ威圧的な表情になる。

「ティアナ・ボルネフェルトさんが見つかりました」

私たちは無言で説明を促す。

「この近くの森の中で」彼はそこで咳払いをして、たつぷり間を置いてから私たちに告げた。「彼女もそこで……、亡くなっ

ていました」

「外に散歩にでも行かないか？」

事情聴取を終えて一度部屋に戻ると、日景は私にそう提案した。

「勝手に外に出ても大丈夫なのでしょうか？」私は無駄に警察に邪推されるのも面倒だと思って日景にそう尋ねた。

「きつと構わないだろう」日景は首を傾げてそう言った。「ここで僕たちがどう動いたって、疑われていることには変わらないよ」

昨日ハインツが言っていたとおり、今日の空はどこまでも青い。ありとあらゆるベクトルが外側を向いているといったそんな陽気。昨夜降っていた雪も地に帰ってしまったようだ。

私たちは庭を出て、黙ったまま森の中を歩く。日景はいつも持ち歩いているハードカヴァの本を右手に抱えていた。

どこかで小鳥の鳴く声が聞こえた。

その音が合図だったというようなタイミングで日景は私に声をかけた。

「千鶴子……」

それを聞いた私は日景の方に注意を向けた。

「ティアナ・ボルネフェルトを殺したのは君だろうか？」日景が微笑んでそう言った。

私も微笑んだ。そして尋ねた。

「何故？」

彼は俯いてからゆっくりと答えた。

「僕の為……、かな？」

森はどこまでも続いているようだった。

樹と樹の間をいくつも抜けて私たちは進む。

目的はない。

それでも私たちは森の中を控え目な速度で歩く。

森は優しく、でも残酷だ。

「どうやらあまり意味がなかったみたいですね……」

私は小さな声でそれだけ言った。

しばらくそうして歩いていると古びた木製のベンチが置いて

あるのが見えた。

何も言わずにそのままそこに座った。

まるでそこに座るのが私たちの運命だったかのよう

に。冬の匂い。

私はそれを感じる。

冬の音よりこちらの方が象徴的で鮮明だと思う。

樹々に切り取られたこのスペースは何かを拒絶しているように大人しい。

時間をどこかに置き去りにして空間だけが足早に進む。

極端な異質同士が微妙な不機嫌ですれ違うようなそんな控え

目な目眩。

私は軽い溜息をつく。

「何か聞こえるのかい？」何も話さずずっと遠くを見つめていた私に日景が尋ねる。

私はほんの少し間を置いてから答えた。

「これはそうね……、きつと世界が崩れていく音かしら……」

そして私は空の青を意識して、ゆっくりとゆっくりと目を

瞑った。

冷たい空気を大きく吸い込む。

それは身体のだどこかに突き刺さるようにして私の中に取り込

まれていく。

こうして冬を閉じ込める。

透明な冬の空気に沈み込むようにして、私は静かに眠りにつ

いた。